

歴史と伝統文化のまち「成田」には、さまざまな分野で活躍した人や郷土の発展のために尽くした人がたくさんいます。先人たちの生き方からふるさと成田の歴史に触れ、未来へ大きく羽ばたく指標となれば幸いです。

第27回 すず き み え きち 鈴木三重吉

執筆活動を始める

鈴木三重吉は明治15(1882)年9月29日、広島県広島市猿楽町(現在の広島県広島市中区紙屋町)に父悦二、母ふさの三男として生まれた。

中学生になると小説や童話を書いて雑誌に投稿するようになり、当時人気の少年誌などに掲載されることもあった。

明治37年、東京帝国大学(現在の東京大学)に入学した三重吉は、夏目漱石の講義を受け、その才能や人柄に傾倒した。同38年に神経衰弱を患い大学を休学するが、静養のため過ごした広島県佐伯郡能美島(現在の広島県江田島市)で、小説の題材を得ることとなり、翌年、短編小説『千鳥』を執筆した。千鳥は漱石の推薦を得て、雑誌『ホトトギス』に掲載された。以降、三重吉は漱石門下の一員となり、小説家として活動を始めるようになった。

明治41年に大学を卒業すると、成田中学校(現在の成田高校)の教頭兼英語教師として赴任した。教鞭を執る傍ら、国民新聞(現在の東京新聞)で長編小説『小鳥の巣』の連載を開始した。筆が思うように進まず辞職を考えるも、当時の校長であった石川照勤(広報なりた平成30年6月15日号掲載)の計らいにより、休職しながら執筆を続けた。苦悩しながらも書き上げた三重吉



左/児童向けの文芸雑誌『赤い鳥』

右/鈴木三重吉の文学碑(場所:成田山公園内)

明治15年~昭和11年(1882~1936)

広島県広島市猿楽町(現在の広島県広島市中区紙屋町)に生まれる。夏目漱石に師事し、小説家として活動を始める。成田中学校(現在の成田高校)に赴任し教鞭を執る傍ら、小説を執筆した。大正7年に児童向けの文芸雑誌『赤い鳥』を創刊。最盛期には発行部数が3万部を超えた。作文の書き方の普及にも努め、全国で講演会を行った。



は、この作品によって小説家としての地位を固めた。

明治44年、本格的に執筆活動をするため、成田中学校を退職し上京。中学校や大学で講師をしながら、数々の作品を発表した。

児童向け文学作品を開拓

大正5(1916)年に長女が生まれたことをきっかけに、童話に関心を持った三重吉は、童話集の編集を手掛けるようになった。そして同7年、児童向けの文芸雑誌『赤い鳥』を創刊。芥川龍之介の『蜘蛛の糸』や北原白秋の『からたちの花』など著名人による童話や童謡が掲載され話題を呼んだ。さらにこの後、新美南吉など当時の新人作家が本誌から誕生し、現代につながる児童文学の発展を担っていくこととなる。

また三重吉は、子どもの個性を尊重し、素朴な感性をありのまま表現させることが大切であるという教育理念の下『赤い鳥』で作文や詩、絵画を募集し、評価するといった取り組みを行った。それとともに、作文の書き方の普及に努め、全国で講演会を開催した。そして、昭和10(1935)年には『赤い鳥』に集まった作文から傑作を選び『綴りかた』を発行した。

児童文学の発展に努めた三重吉は、昭和11年6月27日、53歳でその生涯を閉じた。成田山公園には三重吉の功績をたたえ、文学碑が建てられている。

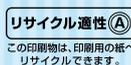
編集後記

皆さんはオリンピック観戦チケットの一次抽選に応募しましたか。私は、そう簡単には当たらないだろうと思い申し込まなかったのですが、周りでは当選したという話もちょうほら聞かれ、中には閉会式のチケットが当たったという友人も。そんな話を聞いて、今更ながらに現地で観戦したくなりました。次のチャンスは二次抽選。陸上、テニス、水泳に体操、開会式も申し込もうかなあ。全部当たったら、来年の夏は大忙しです。

令和元年9月15日号 No.1395

成田市のホームページ

<https://www.city.narita.chiba.jp>



広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。